有明工業高等専門学校

図書館だより

2021. 2. 12

11号

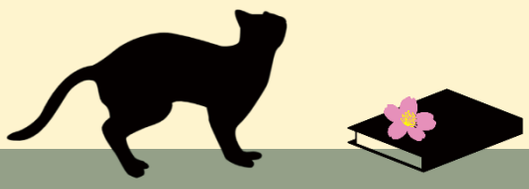
ある「信仰告白者」の苦悩と歓喜

図書館長　村田 和穂

一般に「教授」を指す英語の「プロフェッサー (professor)」に「信仰告白者」の意味があるのをご存知ですか？ その基になる動詞 “profess” は元来「公言する」の意味ですが、それが宗教的な文脈では「自分の信仰を（はっきりと）述べる」という意味に転じて用いられるようになったのです。この意味を知ってから、「教授」というのは単なる職位ではなく、自らの研究を通して培ってきた学問的な「信仰」を学生たちに伝えるのが使命なのだと密かに信じるようになりました。

昨年（2020年）12月の冬休み期間に、母校の大学で「英語学概論」の集中講義を受け持つ機会に恵まれました。「概論」というのは「全体に渡って大要を述べたもの」（『広辞苑』）なので、入門者向けに広く教えることが求められます。とは言え、一口に「英語学」と言っても非常に多岐に渡るため、自分にとってあまり興味のない（したがって真剣に勉強していない）分野も表面的にでも教えるべきなのか、という疑問に直面しました。悩んだ末に出した結論は、建前ではなく本音の講義をしよう、というものでした。それは、英文学作品を正確に読解し、結果的に作品をより深く鑑賞する手助けとなる（と私が信じる）読みの技術に直結した「英語学」の講義、ということになります。もっと具体的（あるいは個人的）に言うならば、有明高専で教鞭を執る傍ら、毎日コツコツと英文学のテキストを精読しながら興味深い用例を集め、それを論文にまとめる際に有益な視点を与えてくれた（特定の）「英語学」の講義。そう、私にとっての「英語学」を受講者に情熱を込めて伝えよう、これが結論でした。たとえ偏っていても、そうでなければこの講義は嘘になると感じたからなのです。というわけで、まず最初にホワイトボードに “professor = 信仰告白者” と大書し、この講義は私の「信仰告白」であることを断ってから授業を開始しました。

受講生は24名（大学院生５名含む）。コロナ禍で対面と遠隔の同時開講になりましたが、対面を希望した学生の方が多く、目の前の一人一人にそれぞれ異なる問いを投げかけその反応にこちらも返す形式で進めました。慣れてきたら、遠隔受講の学生にもパソコンのマイクを通して質問し返答を求める余裕も生まれ、期せずしてインタラクティブな（双方向の）授業になったのです。講師の熱意に受講生の意欲がブレンドされ（おそらく彼・彼女たちも遠隔ばかりの授業に疲弊し対面を渇望していた事情もあったと推測する）、良い雰囲気の学びの場が生まれたように感じます。有り難いことに、一人の学生のレポートに「学習したいと思っていた英語学の講義でした」と書いてあるのを目にして、救われた気持ちになりました。コロナ禍のおかげでこのような貴重な体験ができたのですが、振り返ると、この講義で披露した具体例のいくつかは有明高専での授業で学生たちとのやりとり（多くは珍解答）の中で気づかされた英語の「特質 (nature)」だったのです。その意味で、やはり私は有明高専の学生の皆さんから多くを学ばせてもらっているのだなと改めて感謝する今日この頃です。



私のイチオシ

人間・福祉工学系
メカニクスコース　南　明宏先生

『ファラデー～実験科学の時代』
（小山慶太 著）

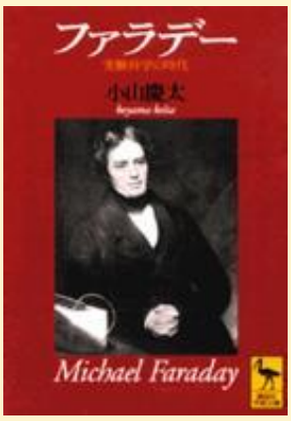
本書籍は20世紀最後の年、つまり、1999年に発行されています。私がこの本に出会ったのは、今からもう15年以上も前になりますが、今回、「私のイチオシ」の執筆の機会をいただくことになり、久しぶりに再読し、敢えて古き書籍を紹介させていただきます。

この書籍の魅力は、単にファラデーが生き抜いた18世紀末から19世紀は勿論のこと、彼の生前及び没後の18世紀初頭から20世紀初頭までに登場する化学、物理、数学、天文等の錚々たる学者陣（例えば、ラザフォード、ガーネット、クーロン、ヴォルタ、リッター、ヤング、ゲイリュサック、ビオサバール、ゼーベック、ダーウィン、ジュール、ケルヴィン、マクスウェル、キルヒホッフ、ベンゼン、ヘルツ、レントゲン、ブランク、アインシュタイン、ケプラー等）との交流関係や業績とも絡めて巧みに紹介されているところです。

さて、書名となっているファラデーについて、皆さんは‘ファラデーの法則’としてよく知っていると思います。この物理法則は、２つの異なる分野の法則が含まれております。１つ目がファラデーの電磁誘導の法則、２つ目がファラデーの電気分解の法則です。

ファラデーは、今から230年も前の1791年にイギリスロンドン近郊で生まれており、時代は丁度産業革命期です。鍛冶屋職人の息子でしたが、生活は貧しく、家計を支えるために、13歳から製本屋の配達人として働き始めました。つまり、13歳以降、学校で勉強をすることができませんでした。幸い、職場には書物が豊富に揃っているため、彼は仕事の合間に数多くの科学書を読むことで科学への興味と憧れを深め、そして21歳のときに仕事で『ブリタニカ百科事典』に触れたことがさらなる起爆剤となり、遂に運命の人、ハンフリー・デイヴィーと出会う（王立研究所主催の公開講座）ことになります。ちなみに、デイヴィーは元素の狩人と呼ばれ、Ｋ、Ｎａ、Ｍｇ、Ｃａ、Ｓｒ、Ｂａの６元素を単独で発見し、さらに他の化学者と同時にＩ、Ｂの２元素も発見しています。現在、118個の元素が知られていますが、８個もの元素を発見したデイヴィーは歴代最多記録保持者ではないかと思われます。

ファラデーは製本職人の腕前を生かし、デイヴィーの講演内容をノートにメモし、記録をまとめ、製本し、手紙も添えて彼に送ったことが功を奏して、22歳で王立研究所の助手として採用され、亡くなるまでの50年余りを研究所の屋根裏部屋（住居と実験室も兼ねて）にて過ごすことになります。以後、この研究所において膨大な試行錯誤の実験を繰り返し、論文も発表しながら数多くの業績を残しますが、ここの部分の紹介は皆さんが実際にこの書籍を読んでいただくことを大いに期待して割愛します。



ファラデーは満足に学校にも行けず、数学、化学、物理等も学ぶことはありませんでしたが、それでも科学に対する溢れるばかりの熱意や情熱、何度も実験の成功と失敗を繰り返しながらも粘り強く、最後まで遂行することで世に残る大きな業績を達成しました。
皆さんも高専卒業・修了もしくは大学卒業後、多くはエンジニアとなると思います。

是非ともご一読いただき、エンジニア魂育成の一助にしていただければ幸いです。

私のイチオシ

人間・福祉工学系
情報システムコース　石川 洋平先生

『うまくいっている人の考え方』
（ジェリー・ミンチントン 著 / 弓場 隆 訳）

皆さん「自尊心」という言葉を聞いたことがありますか？親や友達と喧嘩して悩んだことありませんか？部活で負けて自分を責めたことはありませんか？テストで悪い点を取って落ち込んだことはありませんか？そんな時の心の薬が「自尊心」です。

この本の中には「自分に寛大になる」「自分を大切にする」「自分を受け入れる」「自分の価値を信じる」「自分の人生を生きる」「視点を変えてみる」「自分と出会う・人と出会う」「ポジティブに考える」「ありのままの自分を見る」「自分の手で人生を創り出す」という人生を楽しく生きるための素敵なヒントが短い言葉で100個詰まっています。

私がこの本を手にとったのは大学生の時です。工業高校から大学に進学して、凄く頭のいい人たちに囲まれて自信喪失しそうになっていました。それぞれの中学校のトップクラスの学生さんが集まって「上には上がいるな～（涙）」と思っている高専生とちょうど似た感じです。なので、すぐに全員買ってください♪

本の中の「完璧を求めない」という言葉を紹介します。人は、他の誰よりもきちんとやらなければいけないと思って、絶えずミスを探し求めて発見して完璧にできないとだんだん自信を無くしていく習性があります。でも、そんなに完璧にこなして何がハッピーなんですかね？転んだり、負けたり、泣いたりしながら人は成長していきます。うまくいかないことの連続です。でも、それが糧になることはあってもマイナスになることは私の経験の中では少ないです。それよりも、むしろ、完璧にやり遂げることを目標にしすぎて、最初から尻込みしてチャレンジしないことや、約束した期日を守らないことのほうが大問題になることが多いです。なので、試験が少々悪かろうが友達と喧嘩しようが、完璧に良い点数を取らなくても完璧に仲直りしなくてもいいんです。

自分ができなくて手伝ってもらったり、間違ったりしたら素直に「ありがとう」や「ごめんなさい」を言えたほうが人生ハッピーです。友達に素直にわからないことを聞けること、これも凄い能力だし、会社に入ったら自分で考えるよりむしろ「聴く力・情報を共有する力」のほうが大切なことが多いです。

私は、この本のことを書き始めるといくらでも書けます。大学時代に勉強で悩んだ時に友達が夜遅くまで教えてくれました。その時も、この本を読んで、“変なプライド”は捨てようと思って素直に感謝の気持ちを伝えました。会社をしていたときも、いろいろな人が助けてくれて感謝の連続でした。もう一言引用、「相手にどう思われているかを心配しない（自分が相手に与える印象を気にしないほうが、良い印象を与えられる）」たったこれだけの一言に救われてきました。

自尊心を高めることは高専生（だけではなく社会人・特に新入社員）にとって最も大切なことだと思います。コロナ禍で大変な状況ではありますが、健康第一で、免疫力を高めて、日々、笑顔で過ごしていきたいですね。そんなサポートを教員としてやっていきたいです。いつでもＴｅａｍｓで話しかけてくださいね。

専攻科生より本科生に薦める1冊の本

「新世界より」
貴志祐介 著

7A
稲葉 淑貴

こどもの頃はハリーポッターに夢中だった。濃厚な設定と壮大な世界観は、読むと本当にそんな世界があるのではと思うほどリアリティがなんかもうハチャメチャにヤバく、とにかく物語にどんどん惹かれていた。のでオススメです。ＪＫローリングによると日本にもマホウ・トコロという魔法学校があるので、皆さんも目指すといいと思います。しかしいつからか、ファンタジーを読んでも、「あれ、なんかその話の流れ、無理やりじゃん？自然法則、物理的に成り立つか？う～ん、まァいっかァ！なんかおもしれ～ぜ～～！」となり結局面白い。そんな中「ファイアパンチ」は、最初はファンタジーのように見せてそうではない。「氷の魔女によって雪に覆われた世界」という舞台が、実は「地球が単に氷河期となり、人々が思想統一のため共通悪（魔女）を恨む宗教を信じている」ことがわかり、ファンタジーにＳＦ的視点が加わるのだ。

そんな日本ＳＦの金字塔とも呼ぶべき宇宙史上最も偉大な作品が、「涼宮ハルヒの憂鬱」と云われている。ハルヒシリーズでは、話の中に、ＳＦ的な文脈が至る所にちりばめられている。ダン・シモンズの「ハイペリオン」が登場し、変わりゆく世界を止めるきっかけとなる。主人公が「ハイペリオン」を手にしたのは長門という宇宙人が渡したためであり、この宇宙人の目的は、アーサー・Ｃ・クラーク「幼年期の終わり」がベースとなっている。ハルヒは多くのＳＦ的文脈をくむ、海よりも谷よりも伏し目がちなあの子の瞳の奥のブルーよりも深い作品となっている。宇宙人、未来人、超能力者が送るＳＯＳ団での日常は、多くのＳＦが集合してできたのだ。図書館は早急にハルヒを蔵書すべきである。皆さんも声を上げてください。「新世界より」は読んだとき、こんなのもＳＦっていうんだ～って思いました。

「むかし僕が死んだ家」
東野圭吾 著

7I
三津家 健太

貴方は実家での暮らしを覚えているだろうか。入学、就職、転勤。様々な理由で今現在これからも実家と離れて暮らすことになる人も多いだろう。実家から遠く離れてすごしたり、離れる生活を考えたりすると、実家の安心感というものに勝るものはそうそうない。親の居る安心感、生活の手助けをしてくれる安心感、身の回りが自分の知っているものである安心感。まあ、親がうるさいなど思っている場合は含まれないが。この実家での生活は、多くの人が小さい頃から経験するものであり、今後の自分の生き方に繋がってくる。親との生活、近所との付き合い、親戚との交流、義務教育の期間、様々な出来事が自分を作り上げていくのではないだろうか。

さて、この話はとある男性が、昔恋人だった女性の悩みを解決するために、一軒の古い家を訪れるものである。ところでこの女性だが、人妻である。また、この女性は今でもこの男性との性格など相性が良かったと考えている。世の中不思議である。話を戻すが、この女性は子供の頃の記憶がないのである。貴方は覚えているだろうか、子供のころの家族とすごした記憶を。そして、その古い家は彼女の亡くした記憶を刺激するのである。彼女は子供の頃、家族と、親戚と、どのような生活を送ってきたのか。少しずつ明らかになっていく彼女の生活と彼女の記憶。その情報を読み取り、その先を想像しミステリー小説として楽しむのもいいだろう。そして同時に自分の今までの暮らしを思い出し、今の自分がどのように出来上がったのか。考えてみるのも面白いのではないだろうか。

私はこれからも実家の世話になるつもりだ。私はこれからもこの家で目を覚まし、眠っているのであろう。この家がある限り、私はこの家に居るのである。きっといつまでも、この家には私が居るのである。たとえ私がこの世からさろうとも。

「SOSの猿」
伊坂幸太郎 著

7A
崎田 森平

この小説は「私の話」と「猿の話」が交互に進んでいきます。

「私の話」は、家電量販店で働く30代半ばの「遠藤二郎」の視点で描かれており、物語の主軸は、郷里が同じ「辺見のお姉さん」の息子「眞人」のひきこもりを何とかすることです。二郎自身の行動や考え方が面白いのもありますが、脇を固める登場人物たちがさらに面白くなっており、二郎の母親やコンビニで出会った雁子、そのコンビニの店長、辺見のお姉さん、彼らのキャラに翻弄される二郎の様子がほほえましく感じられます。ここではこれでもかと言うほど噛み合わない会話を繋げていきます。物語の本筋が分からなくなってしまいそうになります。当初の本筋は、眞人のひきこもりを解消することです。その過程を通じて「猿の話」との関係性を匂わせていくのですが、全く予想がつきません。先読みさせない展開は面白い反面、読んでいて迷ってしまいます。この物語はどこに行くのだろうか。もどかしさを感じます。

「猿の話」は、因果関係と孫悟空の話です。「私の話」との関連性が全く読めず、牛魔王や孫悟空が登場するファンタジーの世界となっています。ファンタジーと呼べるほどの爽やかなものではありませが。物語のベースは、五十嵐真による株の巨額損失事件の調査です。現実的な物語と非現実的な孫悟空の組み合わせで話が進み、何とも妙な組み合わせの話となっています。五十嵐真が事件の原因を探るために因果関係を辿っていき、その過程で「西遊記」が登場します。物語の主軸がどこにあるのか。読み進める内に分からなくなってきます。ただ、事件の原因究明以外にも多くの出来事が起こり、おそらくこれらの出来事は、あとで重要な要素になってくるのだろうなと予感はあります。

物語の後半、「五十嵐真の話」の直前に「猿の話」のネタバラシがあります。そのネタバラシを元に「五十嵐真の話」として新しい物語が始まります。「猿の話」が「五十嵐真の話」であり、「五十嵐真の話」が「猿の話」です。「猿の話」と「五十嵐真の話」の比較から物語は更なる展開を見せます。全てが綺麗に組み合わさるパズルのような伏線回収が伊坂幸太郎の魅力とするならば、「ＳＯＳの猿」はらしくない話で、パズルが合わさらないことを前提に物語を終盤に持ち込み、終わらせます。間違い探し、あるいは答え合わせ、どこが間違っていて、どこが合っているのか、その違いの差は、どこにあるのか、みなさん考えてみてください。

「四畳半神話体系」
森見 登美彦 著

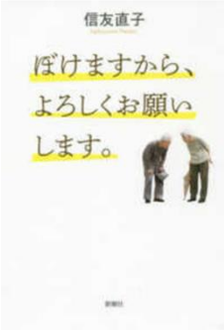
7I
那須 新悟

突然ですが、皆さんの中にはもしあの時変なことを言わなければ、もしあの時この科目を履修していれば、もしあの時高専に入っていなければなどと、いつも発展性の無いタラレバの思考に惑わされている方がいらっしゃるのではないでしょうか？（私もその中の一人です）

この本のタイトルである四畳半神話大系は、「四畳半恋の邪魔者」「四畳半自虐的代理代理戦争」「四畳半の甘い生活」「八十日間四畳半一周」と題された四話から構成されています。

すべての話の冒頭は大学４回生の語り手が自分の生活に不満を持ち、他のサークルへ入っておけばこうならなかったと後悔するシーンから始まり、その大学生活を振り返っていきます。すなわち、４つの話はそれぞれ語り手が別のサークルに入ったときのパラレルワールドの話になっているのです。

この本の見どころは、いくつかの事件は全体と通じているものもあるのですが、事件がその世界に与える影響は全く別のものになったり、伏線になっていたりと、とても斬新な世界観ですが話の内容だけでなく構成にも感心してしまう面白さがあります。最初読み始めた時は文章が独特で読みにくい…と感じられるかもしれませんが、後にその独特な言い回しがクセになると思います（笑）。また、この本を読み終わったときにはタラレバについて考え直すきっかけになると思いますので是非手に取って読んでみてください！



「ぼけますから、よろしく
お願いします。」
信友 直子 著

7E
手嶋 諒治

この本は作者の実の母親を題材とした認知症に関する実話を描いた本で、いつしか自分たちにもこのような日が来るのであろうと思いながら読みました。近いところで言えば祖母や祖父が認知症になるかもしれません。そう思いながら読むと人ごとには思えず、とても読み入ってしまいました。私は本を読む方ではありません、なんなら今まで読みきった本が１、２冊あればいいなと思うくらいです。しかし、この本は、本が苦手な私でも早く次が読みたいと思えるような本でした。ぜひ皆さんにも読んでいただきたい一冊です。

内容を簡単に説明すると、著者である信友直子さんの実の母親が認知症を患い、その中で母と一緒に生活を送る夫や実家から離れて暮らす娘（著者）が母の認知症に対してどのように対応していくのかを実話として書き記したものです。父は母に代わり家事や介護を行う、いわゆる老老介護です。このような状況に娘は仕事を辞めて実家に帰った方が良いのではないか、これからどのように介護をやっていくのかなど色々な葛藤がありその葛藤が鮮明に描かれています。また、葛藤するのは何も周りの人だけではありません。認知症である母も同じように自分のできていたことがどんどんできなくなっていってしまい、どうしたら良いのか葛藤して自分と戦っているのです。このように家族が認知症とどのように向き合っていくのかを描いた作品となっています。

現代では認知症の割合は増加傾向にあるそうです。いつ家族に起こりうるかわかりません。他人事ではない認知症について、深く考えることのできる一冊だと思います。ぜひ興味のある方は一度読んでみてください。

「科学的な適職」
鈴木 祐 著

6A
大仁 一輝

今回は、鈴木祐さんが書かれた科学的な適職という本を紹介します。本書は、こんなあなたにとてもおすすめの本です。現在社会人である方で「今の仕事に不満を感じている」「転職を考えている」人、学生の方・社会人の方で「損のしない仕事選びをしたい」人、そんな方におすすめの１冊になっています。

本書ではあの科学論文オタクの鈴木祐が正しい適職選びというテーマで4021にも及ぶ論文をもとに解説されていますので信頼性が高い内容になっています。また、あのメンタリストＤａｉＧｏさんが驚愕し、「中田敦彦のＹｏｕＴｕｂｅ大学」でも取り上げられ大反響を受けるなど有名インフルエンサーも絶賛する１冊になっているので尚更信頼性は高いです。

適職とは幸福度を上げる仕事の事です。しかし「仕事と幸福度の関係」をみた時、実は私たちはいくつかの勘違いをしており、この勘違いについて知れば、仕事選びで損するのを防ぐ事ができるのです。というわけで本書では「実は幸福度に関係ない７つの項目」「幸福度を上げる７つの項目」「幸福度を下げる８つの項目」について解説されています。「適職の選び方」という題目ではありますが、就職活動以外にも高専の学生生活において本科２年次のコース選択や本科４年次の研究室選択、大学への進学等さまざまな選択をする機会があります。これらの選択も自分の将来を左右する選択になる訳ですから人生の後悔を限界まで減らすため、また納得のいくライフプランにするために是非多くの人の手に取ってもらい、１人でも多く最高の適職を手にとって欲しいと思っています。

「戦争ってナンダ！？」
橋山 勝 著

6I
村崎 陽弥

現代社会において競争とは経済において行われます。これは時に過酷を生み、格差を生むものです。社会的競争は人として生きることの略奪の連鎖です。非常に現代は生きにくいものであるという方も居るでしょう。

では肉体的競争ならば、即ち人命の奪い合いです。過酷を生むに違いはありませんが、そこに格差はありません。これに参加すれば最後、多大なる犠牲を払うことが約束されるのです。人命を失うことは生産性を失うということ、あまりにも合理的でない行動ではありますが、しかしこれは幾度となく人類史において繰り返されているのです。

本書は、この愚行の末路や当時の思想が記述されています。予め申し上げますと、生物には元より競争本能があります。争おうとする姿勢は何ら不思議の無いものであります。しかしながら人間はその手段、手法を間違えてしまったのでしょう。或いは盲目であったと言えるかもしれません。そこは炎、鉄、薬、情報が飛び交い、怨恨、性欲、報復、主従が渦巻いていました。これらが生み出した悲劇から目を背けることは愚策でしょう。それは正に“愚行を行う人々”と同じ考えです。

本書に書かれていることは生理的不快と感じられるかもしれません。死と無意味が明らかな作戦、虚栄と主従だけの性事情、短絡と独善による思想、そのいずれもあなたという魂には受け入れられないかもしれません。それは良いことです。これらを嫌悪する事こそが現代を生きる者にとって必要なことでしょう。しかし、嫌悪することを知らないままであれば、果ては経験から学ぶことになるかもしれません。

経験から学ぶにはあまりにも遅すぎた教訓がここにはあります。望まれない経験は歴史となり、この本に収められました。経験無くして悲劇を悼むに十分な本となっています。是非、「嫌悪する覚悟が出来たならば」お読みください。

「狼王ロボ シートン動物記」
シートン 著

6E
西村 勇輝

この本はタイトルに書いてあるように動物記なのだが、狼王ロボ、灰色グマの伝記、カンガルーネズミ、サンドヒルの雄ジカの４タイトルが書かれている。特に私がおすすめするのは、狼王ロボである。狼王ロボは、シートンの代表的な作品として有名で、知っている人も多いと思う。

私は、たまたま書架整理中にこの本を見つけた。実は小学生のとき読んだことがあり、懐かしく感じたのでこの本を読んでみた。
簡単に内容について説明する。家畜を食い荒らすだけではなく、時には「遊び」のために羊やヤギたちを残酷に殺戮するオオカミたち。その王として君臨しているのが、並外れた知力と強靭な肉体をもったロボだった。獣害駆除に長けた猛者たちが様々な手を使ってロボとその仲間たちを倒そうとするが、まんまとその裏をかかれてしまう。しかしロボにも弱点があった・・・。人間と狼の奮闘を書いた作品である。

この本の面白いところは、いろいろな考え方ができることである。オオカミ目線だと人間は悪者に、人間目線だとオオカミが悪くなる。読者によってさまざまな感想を持つだろう。

また狼王ロボは著者の体験をもとにして書かれている。いわゆる狩猟記であるが、ほかの作品と異なる点は、著者が動物を殺したくないという強い思いを持ちながら、家畜を襲う狼をやむを得ず殺したところである。この物語には、オオカミの知能や家族愛に対する賛美が込められており、ロボの妻だったブランカをおとりにしてロボを罠にかけたことに対する著者の悲しみが伝わってくる。

いろいろ考えさせられる作品となっているので、ぜひ、読んでみてほしい。

「自分はバカかもしれないと
思ったときに読む本」
竹内 薫 著

6A
本梅 伍乃

自分はバカかもしれない、と私は常々思っている。自分は日本人なのに日本語は下手と常に自分で認識しているほどである。一冊の本を読んで、それがすんなり身につくなら、どんなにいいだろうと思う。もし、本を読めば読んだ分だけ知識が蓄積できるなら、学ぶことはこの上なく楽しいものになると思う。でも、現実は違う。読み終わって「面白かった！」と思っても何日か経つと内容はほとんど忘れてしまっている。読んだ内容を忘れているくらいなのだから、この本は大して面白くなかったのかと言われれば、そうではない。こんなおバカな私に、希望を持たせてくれるようないい本だった。

この本によれば、努力と成果は比例関係ではないらしい。つまり、やればやるだけ身に付くようには、人間はできていないらしい。やってもやっても成果が実感できなくて、俺ってバカかな、と疑心暗鬼に陥るかもしれないけど、それでも続けていると、ある日ポンっと壁を越えることができる。そういう日が必ず来る。だからそれまで腐らずに、コンティニュードゥーイングしようぜ！本書はそういって私を励ましてくれた。よく考えてみると、こういう経験は私にはある。中学時代、１週間前にはテスト勉強を始めていたのに全く成績は上がらなかった。しかし、高専に入学して気付くとその壁を乗り越えていた。これは、中学時代成績が伸びず悩んだけど、あきらめず努力していた結果かなと今考えると思う。

作者の言う通り、ハードルを最初から高く設定せず、勉強や自分の目標に向かってコツコツ行動し続けることの大切だと改めて感じることができるような本でした。もし、自分はバカかもしれないと思って、自信を無くしてしまった時にはこの本を手に取って読んでみてください。

三 ほかにも 専攻科生の選書あります 三

- LESS IS MORE 自由に生きるために、幸せについて考えてみた。/ダイヤモンド社
- 日本経済学新論/筑摩書房
- 影の宰相 小早川隆景/南々社
- 「もの」はどのようにつくられているのか？―プロダクトデザインのプロセス事典/オライリージャパン
- いつも人のことばかり考えて凹んでしまうあなたが「ま、いっか」と思える本/長岡書店
- 涼宮ハルヒシリーズ/KADOKAWA　　etc…

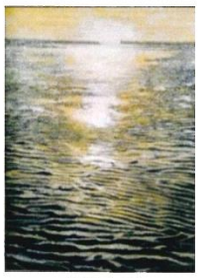
2021年有明高専美術ギャラリー作品紹介

昨年の１１月１４日に作品の入れ替えを行い、また床の張り替えも行いました。

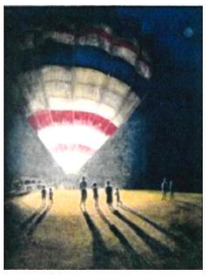
図書館棟１階に素晴らしい作品を多数展示しておりますので、ぜひ間近でご鑑賞ください。

絵画

『廃坑』
小柳　規久絵



『落日』
桑野　禎子



『バルーン』
藤吉　美保子

『彩』
上村　恵子

『夜の波動』
奥苑　和司

『春が来た』
木村　和子

『花暦』
石井　保

『緑の屋根』
牟田　英昭

『融合』
横山　多佳枝

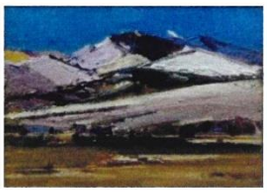
『見つめる』
木戸　直道

『サンマルコ寺院』
岩本　久子

『女性像』
永井　正文

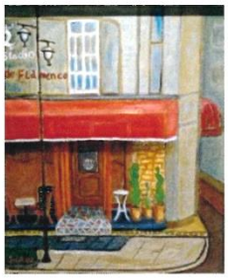
『ドナウベントの午後』
松尾　正勝

『風の記憶』
牟田　志津子



『朝暘阿蘇』
加治屋　陞

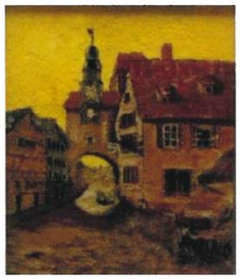
『阿蘇、春』
松尾　忠之



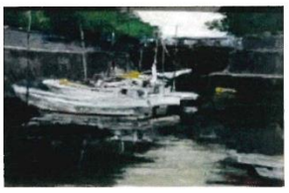
『街角のカフェ』
田中　栄

『心の遊び事』
河島　房子

『筑後の秋』
西川　正人



『チェイサー』
塚本　和美



『河口の船着場』
堤　和則

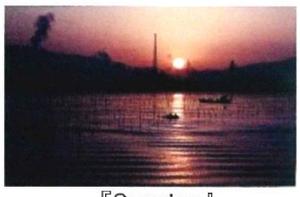
『椿の里』
黒田　満里子

『残雪』
清水　正敬

『ガーデン』
田中　陽子

『夜の波動』
奥苑　和司

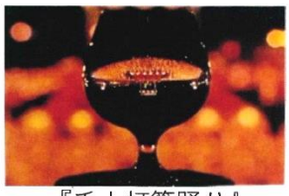
写真



『Sunrise』
田中　浩久

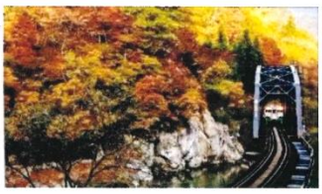
『Sunrise』
藤﨑　聖二

『凛々しい少年』
鈴木　安徳



『千人灯籠踊り』
高口　博文

『無限列車』
今村　誠二

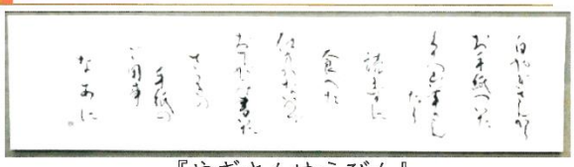


『旅』
渡邉　精之

『L・O・V・E』
ふるいけ博文

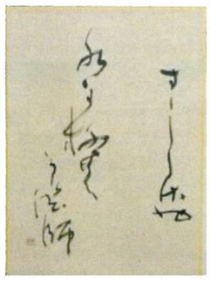
『寄せる黒波』
河野　孝宏

書

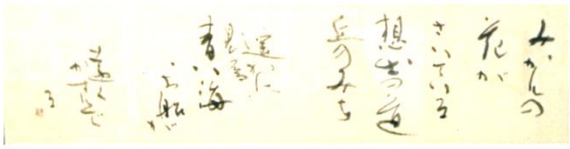


『やぎさんゆうびん』
山下（渓子）渓舟

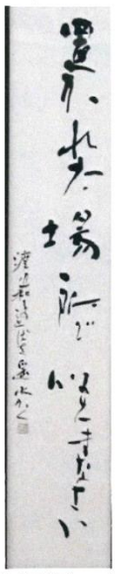
『蘇軾詩』
高井良　暁春（幸子）



『すゞしー山崎宗鑑の句』
小柳　少鼎（和孝）



『童謡　みかんの花咲く丘』
川口　少香（川口富子）

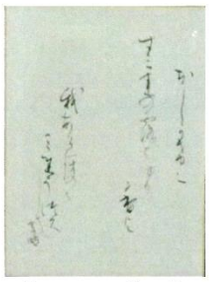


『置かれた場所で咲きなさい』
川井（昌子）遥水

『以虚受人』
山口　八石（修一）

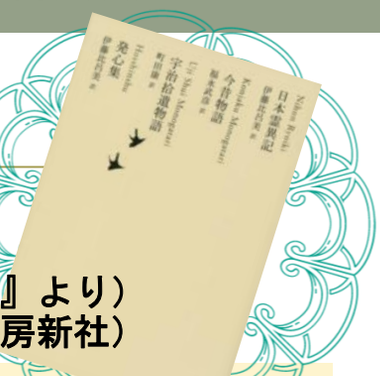
『進』
奥薗　千万喜

『辛夷隠』
中本　管城（守）



『ほしかげに』
松尾　理恵子

私のイチオシ【番外編】



「宇治拾遺物語」

（日本文学全集『日本霊異記、今昔物語、宇治拾遺物語、発心集』より）
（河出書房新社）

作家の池澤夏樹による「池澤夏樹=個人編集 世界文学全集」（全30巻）と「池澤夏樹=個人編集日本文学全集」（全30巻）は全ての図書館が揃えておくべき全集である。一冊一冊はシンプルな装丁だけど全体として見るとカラフルで美しく実にお洒落だ。もちろん外見だけでなく中身も非常に優れたもの。作家・作品のチョイスに池澤のこだわりとセンスが光る。「世界」の方は20世紀の近現代の作家に絞られ、様々な国の作品が集められている一方で、「日本」の方は『古事記』から現代の作家の作品まで歴史的パースペクティブに基づき編まれているが、古典の散文は全て現代語訳にしているところが最大の特徴と言える。

まだ全部を読んだわけではないけれど、私のイチオシは『日本霊異記、今昔物語、宇治拾遺物語、発心集』の第８巻である。このうちの「宇治拾遺物語」（抜粋）は作家でロック・ミュージシャンの町田康が訳していて、これが個人的にはツボってむちゃくちゃウケる。例えば「絵仏師の良秀は自分の家が焼けるのを見て爆笑した」という表題がついている第38話は芥川龍之介の短編小説「地獄変」の元ネタである。芥川の短編は、芸術家の業(ごう)とも言える「内なる悪魔（デーモン）」を描いた不気味なテイストの作品だが、町田訳で読むオリジナルは驚くほど軽いノリの小話になっている。話の筋は仏画専門の画家である良秀は、ある時近所で火事が起こり、その火が彼の家にも燃え移り、家の中には妻子がいるのに一向に慌てる様子もなく、なぜか爆笑する始末。この続きを町田訳で読んでみよう（良秀のセリフは具体的な関西芸人の口調をイメージして読むことをお勧めします）：

近所の人たちは顔を見合わせ、「気の毒に。あんまりショックやったさかい、頭おかしなったみたいでっせ」と言い合っていた。

ところが、これを聞き咎(とが)めた良秀ははっきりした口調で言った。

「誰が頭おかしなっとんね。ちゃうわ。あのねぇ、私はねぇ、もう長いこと不動明王さんを描いてきましたけどねぇ、後ろの火焔(かえん)が、いまいち迫力がのうて、なんぞこう、ええ工夫はないもんかなあ、と思ていろいろやってみたけど全然、うまいこといけへなんだんですわ。それがいまあの火ぃをみてるうちに、あ、なるほど火ぃ、ちゅうのはこういう風に燃えるのかとね、わかっちゃったんですよ。それが儲けものっちゅうんです。家は燃えました、家は燃えましたけど、これで完璧な不動明王さんが描けまんがな。ほしたら銭、貰(もら)えまんがな。ほしたら家みたいなもん、百軒でも千軒でもたちまっしゃろがな。（後略）」

ただ笑うしかない。この訳はちょっとやりすぎかもしれないけど、説話文学ってこんなに面白いものだったんだ。

でも、町田訳で一番面白いのは何と言っても第６話である。ただし、この表題は書くのも憚られるほど露骨であるため、興味のある人だけ本を手にとって読んでみてください。

（図書館長　村田）

編集後記

今回もアルバイト学生に本を紹介してもらいました。他の人のオススメを見ると今まで興味のなかった本もなぜか気になってきませんか？その本が自分と相性が合う本だったらラッキーです！とりあえず手に取ってみたら何かが変わるかもしれませんよ。また、11月に美術ギャラリーの入れ替えをしました。作者の方は「自分の大切な作品を見てもらえて嬉しい。」とおっしゃっていました。私も学生の皆さんが絵について話していると嬉しくなります。一年間作品を楽しみましょう！[図書情報係　八頭司]